

札幌市立八軒西小学校の取組

(学校ホームページ：<http://www.hachikennishi-e.sapporo-c.ed.jp>)

1. 学校紹介

本校は、全 17 学級（うち特別支援学級 1 学級）、全校児童が約 480 名の学校で、「心をつなぎ 輝く あしたをつくる八軒西の子」という重点目標を掲げています。これは、校歌の歌詞の「やさしい心 よせ合って みんななかよく 肩を組み 輝くあした つくろうよ」という言葉から生まれたものです。学校生活の中で、子どもたち同士のふれあいや学び合いを大切にしたい教育を目指しています。

2. 取組のねらい

学校紹介で述べたように、本校では、子ども同士によるふれあいや学び合いを重視しています。学校行事や日常的な子ども同士の関わり合いの中で、自然な形で運動への取組がなされるよう、工夫をしています。子どもが自発的に体を動かすようになること、また、子ども同士で励まし合いながら運動に取り組むようになることを目指しています。

(1) 朝の活動の時間を利用した運動会表現の練習例

朝の活動の時間などを利用し、上の学年の児童が下の学年の児童に表現の基本的な踊りを教えに行きます。そのメリットとして、次のようなことが考えられます。

- ・休み時間に子どもたちが自主的に集まって、音楽を流しながら練習する姿が見られるようになる。
- ・基本的な踊り方を身に付けられるため、運動会練習における体育の時数をより有効に活用することができる。
- ・異学年の交流が深まるとともに、上の学年の児童は上級生としての自覚と責任感がより強くなり、下の学年の児童は、上級生に対する感謝の気持ちが深まる。



左の 2 枚の写真は、4 年生が 3 年生に花笠音頭の振付けを教えている様子です。この日をきっかけに、休み時間にお互いの教室に自然と集まり、自発的に練習を繰り返す子どもたちの姿が見られるようになりました。また、4 年生が個別に細かな振付けまで教えてくれたので、教師による全体指導の時間がより充実したものとなります。

右の写真は、卒業前の交流で、6 年生が 4 年生に南中ソーランの振付けを教えているところです。その後も自然と交流が続き、卒業の直前まで 6 年生の教室に通って振付けを教えてもらう 4 年生の姿も見られました。

このふれあいには、次の年度に新 5 年生が基本の踊り方をある程度覚えている状態で、表現の練習を始めることができるというメリットがあります。

(2) 学習発表会の劇や表現発表の中になわ跳び運動を取り入れた例

劇の演出の一環で、表現パートに一輪車やマット運動、短なわなどを取り入れました。また、音楽表現の学年では、器楽演奏のリズムに合わせて長なわ(8の字跳び)を行うというパフォーマンスを行いました。

体育の学習で取り組んできたことを基にした表現ですが、学習発表会の練習を通して、もう一度体育で取り組んできた運動に親しむことができました。また、学習発表会が終わった後も、休み時間に長なわをして遊ぶ子どもたちの姿が見られました。

右の写真は、なわとびチームの練習風景です。このように、連日長なわの練習に取り組んで汗を流す様子が見られました。

また、なわとびチームの子どもたちの姿に刺激を受けて、他の子どもたちも学習発表会後に一緒に8の字跳びをして遊ぶなど、遊びの広がりも見られました。



(3) 委員会活動の「雪と遊ぼう集会」の実践例

本校のふれあい委員会(異学年交流の企画・運営を行う委員会)では、例年冬の時期に、雪合戦、雪積みリレーなどの「雪と遊ぼう集会」(雪中運動会)を企画し、実施しています。

冬期間、なかなかグラウンドに足が向かない子ども

も、この日は喜んでグラウンドに出かけ、汗をかきながら楽しく遊んでいる姿が見られます。この活動をきっかけに、外遊びを楽しむ子どもも増えてきました。(写真は、左が1・6年生の、右が3・5年生の「雪中こおり鬼」の様子です。)



(4) 委員会活動の「体力測定」の実践例

続いて、本校の保健体育委員会の実践例です。こちらは例年、腕立て伏せ・腹筋・背筋・反復横跳び・垂直跳び・握力の6種目の測定を行う「体力測定」を実施しています。委員会児童の手による測定で、中休みを利用して3日間の日程で行われます。本格的な測定というよりは、子どもたちが自由に、気軽に参加できるような内容となっており、子どもたちが運動に関心をもったり、自分の体力の様子を知ったりすることにつながっています。

3. 成果と課題

運動するきっかけづくりや身体を動かす場を設けることにより、子どもたちは自然に遊び、仲間と楽しく運動に親しむ場面が多く見られるようになりました。

本校では、今後も引き続き、子どもの体力向上に結び付くような取組を進めていきたいと考えていますが、一時だけの活動とするのではなく、継続的に運動に親しむことができる活動となるよう留意しながら、子どもたちに身体を動かすことの楽しさや喜びを味わわせていきたいと考えています。